

京都のキッシュデザインを探索 ～建築界におけるキッシュデザインの確立～

今川 朱美

IMAGAWA Akemi

1 はじめに

町屋の並ぶ京の風情が、四条通、三条通と、その2つの通りを結ぶ河原町通などから姿を消し、中京区を中心にモダンな商業建築が建ち並ぶようになって久しい。

日本において戦後に建て直された公共建築のほとんどが、先進国が支持した建築様式であるインターナショナル・スタイル¹⁾の影響を受け、丹下スタイル²⁾とも言われるコンクリート打放しのモダニズムスタイルであった。都市に建設される建築はモダンになり、その後、高度成長期といわれる社会を反映するかのように建築様式もポストモダンへと変容を見せた。モダンデザインは社会の進歩を表現しながらも、伝統的で体制側の慣行を正当化する概念にすぎない³⁾とされているのに対し、それを否定する思想を持って誕生したはずのポストモダン社会でのデザインの虚弱さから、特に商業建築を中心として装飾的な俗なるデザインが求められるようになり、記号性の強い建築が、もてはやされる時代となった。建築家たちは、記号論を掲げるヴェンチャーリ⁴⁾が建築意匠に秘める記号的仕組みを学ぼうとした。

そのような建築デザインの移行のなかで、ある特定の建築物が、特殊な装飾性をみせるようになった。「キッシュデザイン」の登場である。その象徴とされているのが、昭和40年代から姿を現したラブホテルである。中世時代の西洋の城をまねたものや、コロニアルスタイルと思われる派手なデザインの建築が、全国的に国道沿いやインターチェンジ付近に建設された。

主に風俗関係の建築に利用されていた装飾的なデザインが、時代の流れと共に一般社会にも拡がることになった。パチンコ店などが、独特のメカニクなデザインで存在を主張するようになり、都市郊外の国道沿いの駐車場つきレストランや書店にもランドマークになり得るための装飾的なデザインが見られるようになった。1980年代、バブルの時代と呼ばれるころ、西洋の城を思わせる結婚式場やカラオケ店、アーリーアメリカンスタイルのペンションや喫茶店などが現れた。くらしと直接結びつく住宅でも、そういったデザインがもてはやされ、商品化住宅と呼ばれる住宅メーカーの取り扱うコロニアルスタイルや、アメリカカントリー風、赤毛のアンの家風など、物語にでてくる様なおうちが、開発住宅地に並ぶようになった。

その風潮は、伝統を重んじ、法的手段によって厳しい景観規制がなされているはずの京都でさえ見受けられる。いつから、そんなことになったのか、皆の目にはどのように映っているのか。2003年度「都市計画A」の授業の中で、都市の景観について講義を行い、受講者に京都市内に現存するキッチュなデザインの建築を探し、レポートするように課題を出した⁵⁾。若干の考察を加えながら、学生による調査の結果を記録にとどめたい。

2 「キッチュデザイン」とはなにか

「キッチュ」とはドイツ語で、まがいもの、俗悪、といった意味があり、通俗的なものへの総称とされている。一般的には、モダニズムのように機能を優先するものではなく、商品の形態やサービスの特徴を直接的に引用する、というように、キッチュデザイン誕生初期においては広告的な意味合いが強かったように思われる。アメリカなどでは1960年代から、国道沿いのレストランなどでは、ハンバーガーの形をしていたり、大きなコカコーラの瓶が取り付けられていたり、直接的に運転者の視覚を刺激し食欲をそそるような看板効果を狙うものが多く見られた。

一見、悪趣味とも受け取れる「キッチュデザイン」であるが、マテイ・カリネスクによると、中産階級の趣味や、それに特有な余暇への快樂主義の表現として誕生したものである⁶⁾とされている。経済的・心情的に余裕のある人々が、ジョークを遊びとして表現したものであるとも言える。

つまり、建築（構造）物のキッチュデザインとは、その定義を次の2つに分類できると考えられる。

- ① 商品の形態やサービスの特徴を直接的に引用したもの。
- ② ゆとりの中で、ジョークを遊びとして表現したり、奇をてらったりしたもの。



図1 犬の専門店（202A047 三木佑美）



図2 国道1号沿いのファーストフード店

①の具体的な例として、京都市内にあるファサードに巨大な犬が寝そべる犬の用品店(図1)をあげたい。西京区の国道9号沿いにあるため、走行中の車の中からも、認知できるように考えられていると思われる。また、同じく9号、及び1号沿いには、印象にのこる看板機能もしくは、ランドマークとして記憶に残る建築物が多数認められている。筆者が学生たちにキッシュデザインの例の1つとして紹介したものは、山科区の国道1号沿いにあるファーストフード店であるが、増築されたプレイルーム部分が、フライドポテトの形状(図2)を見せており、商品の形態を直接的に引用したものとして、非常にわかりやすい。いずれも、走行車内から見られることを意識し、広告としての建築表現になったと考えられる。それらのデザインがキッシュなものであることは言うまでもない。



図3 WEEK (202A023 佐々木彩子)



図4 SYNTAX



図5 丸東第15ビル

②については、キッシュと感じるか、芸術的と捉えるか、見解が分かれるところであると思われるが、学生から提出されたレポートのうち実に3分の1程が、建築家のデザインした個人的な商業ビルなどをターゲットとして調査していた。このことから、我々は②もキッシュであると判断した。京都市内で活躍されているアトリエ派といわれる建築家に、高松伸氏と若林幸弘氏がおられるが、両者のデザイン・設計された建築物は、学生たちのレポートとして複数の作品が調査対象となっていた。まず、前者の高松伸氏は、北山通りに4つの商業ビルを設計しており、そのうち3棟の「WEEK (1986)」(図3)「SYNTAX (1990)」(図4)「北山Ining'23 (1987)」が現存している。いずれも、その奇抜でメタリックなデザインが人目を引く。学生たちは、その形態をロボットのようなだと表現している。後者の若林幸弘氏は、祇園に比較的接近して2棟の商業ビル「丸東第15ビル (1990)」(図5)「丸東第17ビル (1991)」を設計しているが、学生には、いずれもロケットのようなだと評されている。なぜ同じ建築家が同じようなデザインのビルを同じエリアに建てたのかと疑問に感じるらしく、キッシュデザインは、オンリーワンであることに意味があるのではないかという意見だ。

3 京都市内の「キツチュデザイン」を探せ

京都だからこそある、キツチュデザインというのものもある。歴史遺産である「北山鹿苑寺（金閣寺）（1397）」も権力を“金”によって、そのまま表現しているところからして、充分キツチュなデザインである（図6）。学生たちのレポートで最多であった「京都タワー（1964）」も、和ろうそくの形をそのまま表現したものである（図7）。これらは、先の分類でいうと①であ



図6 金閣寺



図7 京都タワー（202A029 高橋拡衣）

るが、京都という土地にあるからこそ、その表現しようとするものが何であるかを多くの人が受け止めているのではないか。特に京都タワーについては、京都の住民から未だに反対意見もあるものの、旅先から新幹線や高速バスなどで京都に戻ってきたとき「京都タワーを見ると京都に着いたと思う」という声も聞かれる。特に、夜に戻ってきたとき、夜空にやわらかく輝くタワーを見つけると、とても懐かしい気分になるという。



図8 アズール（202A047 三木佑美）



図9 the eel bed（202A053 李行祥）

先の分類②についても、京都を意識した作品がある。大杉喜彦の「アズール」（図8）は、京女の手鏡をモチーフに、ファサードをデザインして

いる。同じ建築家が京都に設計した併用住宅（歯科医院）に「the eel bed（うなぎの寝床）」（図9）があり、東京に事務所を構える大杉氏は、京都からの設計依頼に京都らしさを取り入れることにより応えたのではないか。

これらを含め、京都市内のキッシュデザインのうち、今回のレポートにて調査されたものを地図上に落としてみた。（図10）多くの場合が、商業地区に建設されており、なおかつ主な道路に面していることが多い。また、冒頭に述べたように、国道沿いなど、通過交通量の多い道路に面している場合も多く見られる。キッシュデザインは、見られることを意識しての表現であることが、このことから判る。



図10 京都市内におけるキッシュデザインの建築物分布図

4 時代背景と「キッチュデザイン」のあり方

提出された学生のレポートの竣工年データをまとめ⁷⁾、年代別に、キッチュデザインの建設件数を見ると、1990年代が最も多くなっていることがわかる。しかし、京都市はもちろん日本国内の建設件数は、1980年代のバブル期が最多となっており、全国でGNPの17.1%⁸⁾が建設費に消費されている。1990年代は15.9%⁸⁾となり、バブル崩壊後は建設業界が冷え込んだと言われている。にもかかわらず、キッチュデザインの建築建設件数は、1980年代よりも、1990年代に増加している。1990年代の中でもいずれかの年度に偏るのではなく、1990～1994年が4件、1995～1999年が5件となっている。このことから、経済的なゆとりよりも、精神的な余裕が、キッチュデザインを世に出すキーとなっていることがわかる。

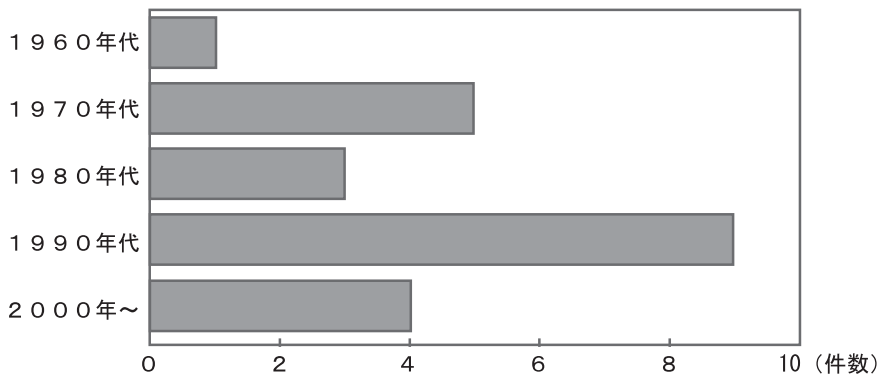


表1 年代別キッチュデザインの建築物建設数

1970年代にも建設件数の伸びが見られるが、この時代の例として、レポートに取り上げられたテーマで「京都タワー」について人気のあった、山下和正氏によるアトリエ併用住宅「顔の家（1974）」を挙げたい。同じく、顔をモチーフにした建材メーカーのショールームの「キッチンハウス（1973）」は、小西デザイン事務所とダン建設事務所の共同設計である。どちらも似た時期にデザインされているが、この頃の日本は、石油ショックがあったものの、経済力が上向きになりカラーテレビが普及していた時である。このようなユーモアが世の中に受け入れられる時代となったことを象徴しているのではないか。このことから、やはり「ゆとり」がキッチュデザインを生み出すという②の定義が成り立っていることを示唆している。



図11 顔の家 (202A055 王静)



図12 KITCHIN HOUSE (202A016 賀集真穂)

5 まとめ

キッチュなデザインとは何か？ということから学生に問い、あの建築はどうか、これならキッチュじゃないかと、何度もやり取りがあった。課題を出して間もない頃は、住宅メーカーの建てるスペイン風のおうちや、テーマパークのようなものをイメージする学生が多かったが、実際にレポートとして独自に調査したのを見ると、建築を専攻する学生だけあって、建築家の設計した住宅ないし、商業施設がほとんどであった。また、最初は、キッチュなデザインというと、低俗なものというイメージがあったようだが、むしろ、夢があるものや、ユーモアあふれる場合のほうが多いのではないかと、考え始めたようである。

現実問題として「キッチュデザイン」というのは、都市景観の秩序を乱すものであることが多く、建設の予定がある場合に建築説明会などが開催されたときから反対されるようである。しかし、実際に建設されてみると、ランドマークとして機能したり、「〇〇みたい」と言われるようになり、ついには、愛称がつけられることが多いようである。たとえば、京都駅が「京都を南北に分断する壁みたいだ」と言われ、その建設をめぐる議論が交わされ、反対運動も行われたが、今となっては「ちょっと、壁、行ってこ～」と、壁が愛称となりつつあるようである。

京都らしさ、京都の文化、とは何か？ 京都という土地は、本来、珍しいものが好きで、舶来ものも柔軟に受け入れることができる寛容な地域であった。ただし、質の良さということを厳しく問うてきたのではないだろうか？ 今日、町屋を保存するために、その格子をアルミで作ったり、トタン屋根でサイディングの壁の住宅を町屋だと言ってみたり、それこそ「キッチュ」なのではないだろうか。



図13 カポディモンテ (203XA03 平居千佳)



図14 住宅 (202A028 高田美穂)

北区にあるイタリアレストラン（図13）も、白川通り沿いに見上げるヨーロッパの宮殿風住宅も、京都らしさという点では、首を傾げるが、組み立てたものではなく、きちんとした工法で建設されているためか、さほど違和感を感じない。外壁が日本家屋にも使用されている塗り壁であるからだと感じた。現に、三条通りには、明治期に建設されたレンガ造の建物が今も残っている。モダンな京都としての情緒を感じるその建物群も、建設当初は、英国の建物を真似た「キツチュ」なものといえられていたであろうが、時間が経てば、そのものの良さを認められ、今では高く評価されるようになっていく。

これからも、京都に目を見張るような建築物が増えてもいいのではないと思う。ただし、プレハブではなく、本物の建築であることが条件である。本物であれば、それは、キツチュデザインとして、京都の街に受け入れられていくだろう。

<註>

- 1) インターナショナル・スタイル；ル・コルビュジェやミースに代表される建築様式。合理主義と技術革新を両輪として大量生産、大量消費の工業化社会を出現させた20世紀の精神を造形化していると言われる。
- 2) 丹下スタイル；昭和30年代に多くの庁舎が建設されたが、それらのデザインが梁柱を強調するような表現となっている。デザインの普及は丹下健三の東京都庁舎（1957）、香川県庁舎（1958）の影響によるものであるとされている。
- 3) ジョン・サッカラ（J.THACKARA）（オランダ）による定義。Kent大学で哲学を専攻していた氏は、ヨーロッパデザインのオピニオンリーダーと言われている。著書に『New British Design（1987）』がある。

- 4) ロバート・ヴェンチュリ (R.Venturi) は、プリンストン大学で建築と美学を専攻し、ローマのアメリカーナアカデミー留学中に出版された『建築における複合と対立 (1966)』の中で、近代主義のピュールタンの教義においては否定されていた複合や対立を、空間や建築の可能性を提示し、その論理が支持されるようになった。
- 5) 受講者のうち、その半数にあたる36名がレポートを提出した。残りは期末試験に全力を注いだ者か、本年度の単位取得を放棄した者である。
- 6) マテイ・カリネスク Matei Calinescu ; Faces of Modernity, Indiana, 1977 (邦訳: 富山・梅沢『モダンの五つの顔』せりか書房, 1989)
- 7) 「京都タワー」や「顔の家」など、同じターゲットを調査していた場合は、1件のみを取り扱っている。明らかにキッシュデザインとは言いがたいものや、竣工年があやふやなものについては、省いている。また、金閣寺のように、歴史的なものもこのデータには入っていない。
- 8) 建設省のデータによる。

<謝辞>

受講生の中でも、三木佑美 (202A047) 氏には、限られた時間の中で、積極的に協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。

<参考文献>

- ギャラリー間 編, 『建築MAP京都』, TOTO出版, 1998
- A.モル・万沢正美訳, 『キッチュの心理学』, 法政大学出版局, 1986
- 石子順造, 『キッチュ論』, 唸嘛社, 1989